実践日 2015/06/25

The Futaka Spirit

(現教だより第9号)

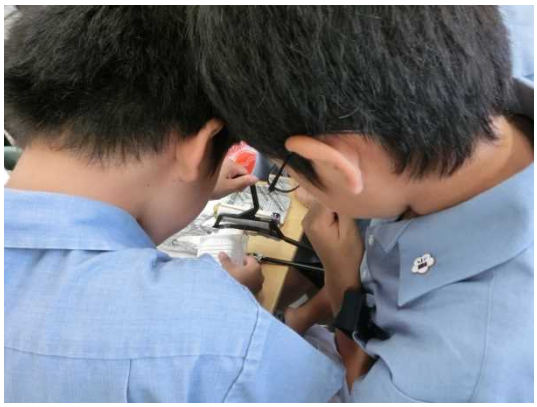
５年　学級創造活動
活動名「誰かの役に立ち，自分の力の源をつくろう」

支援者　吉原　聖人　先生

４５分という枠の中で学級創造活動はどのように進められるのか，一例として提案して頂きました。どのような視点で活動を吟味し，修正していくのか，今後の活動が楽しみです。

【子どもの活動】

1　グループに分かれて探究，表現を行う。



思い思いの活動を進めていく

活動を人に伝えるための画用紙

2　活動を人に伝えるための方法について話し合う。

互いの進め方について話し合う

活動とゴールとのつながりを意識させる

3　教師の話を聞く。

4　本時の振り返りを書く。

ゴールの意識は大切だが・・・

活動の振り返り

（文責　橘　慎二郎）

【吉原先生コメント】

自分が探究的に活動を体験している中で，友達の活動の様子に触れ自らを内省し，よさに気付いたり，改善点を見付けたりすることのできるきっかけだと考える。それが教師のしかけにより，子ども同士で導き合えることで，自分にとって意味のある知になると考えます。

吉原実践【5年 学級創造活動】
～ 誰かの役に立ち，自分の力の源をつくろう ～

本実践の主張点

学級創造活動において，思いや願いを叶える探究活動にするために，

○ 学級創造の時間を構成する要素を挙げ，45分の学級創造活動の運用方法を探ることにより，探究活動を充実させる。

学級創造を構成する要素について

本校の学級創造活動は月曜から金曜まで，常時２５分単位で運用されている。また，３年生以上の学年については，週１回，月曜日の２校時に４５分間という，教科学習と同じ時間での創造活動が設定されている。本提案ではこの４５分間の学級創造活動の時間を効果的に運用するために，活動を構成する要素を複数個設定し,それらを組み合わせながら授業づくりを行うという方策が取られている。この活動を構成する要素としては,「個の求める探究活動」や「振り返り（メタ認知)」「体験活動の共有」など，子どもが主体となって行われるものや,「思考操作による学びの集約・拡散」「教材の提示」など，主に教師が主体となって行われるものなどがあり，組み合わせ方によって教師の意図性と子どもの主体性のバランスが変容していくといえる。本時は「探究活動」から「活動の紹介・共有」そして「振り返り」という要素を用いた構成となっていた。ただ，要素については提案されたものの，本時の構成の特徴や，その要素を選んだ理由については明確に示されなかったため，授業者の意図がやや伝わりにくいという印象であった。今後は，子どもの見方・考え方を育むために，１つ１つの要素の吟味を行っていくことに加えて，２５分と４５分ではどのような要素の組み合わせが適切であるかを明らかにしていくことが大切であろう。

教師の支援について

創造活動における教師の支援として大きな割合を占めるのが，年間または単元レベルでの長期的な授業づくりのしかけと，価値が創造される瞬間を捉えた本時レベルでの助言や発問である。吉原実践における授業づくりのしかけの概要は以下の通りである。

①志向…状況に応じて共通体験を行ったり，教材を提示したりする。
②共感・協同…教師の見取りを即時的に個や集団に返す。
③有用…次年度のことも視野に入れながら内容の質が高まるよう課題意識をもたせていく。

また，本時レベルでの支援としては，子どもに今後の見通しを語らせる機会を複数回設定したり，内容や方法決定の際に大切にしたい事柄を，教師が説明したりする場面が多かった。

縦割りでも学級でも，創造活動の支援の基本が「大きくしかけ，そして待つ」ことであることから考えると，ここでの支援はやや教師の意図が強いように感じる。活動初期の「気付き」「問い・願い」の段階であることを考慮に入れたとしても,子どもの意識が変容するきっかけは教師の言葉ではなく，具体的体験や自他評価によるものになるよう，教師の出方を考えていく必要がある。本時は学級創造活動が活動主義に陥らないよう学びの目的を意識させたいという思いから，後半特に教師の語りが多かった。学びの目的の共有は資質・能力の育成に関わるところであり，学びのプロセスを重視するという点から考えても，絶対に欠かすことのできない過程である。しかしながら，具体的な体験が乏しい段階では，子どもたちがいかに想像力を働かせたとしても，なりたい自分の姿を思い描くことは困難であると考える。そう考えると，まずは子どもと対象との関わりの時間をしっかりと確保し，思いや願いに沿ってとことん没頭していく時間が必要である。そして，そのような没頭の結果，少しずつ自分の未来が見えてくるのではないだろうか。

成果と課題

○ 個々のしたい思いを受容的に受け止めることにより，子どもたちが伸び伸び活動することにつながっていた。
△ 「しかけて待つ」そして「出てきた物を評価して指導に生かす」という創造活動における基本的な教師のスタンスに立ち返り，子どもの感受を促すような間接的な支援の在り方を考えたい。
△ 学級創造活動は個人での探究の時間として設定しているが，本提案ではほとんどの子どもがペアまたはグループで活動していた。個人とペア，グループで進めることのメリットとデメリットを今後さらに整理していく必要がある。